

## まえがき

Charles Eisenstein は資源、環境、経済、社会など現在の世界的な危機の後に来る社会の経済を神聖な経済 Sacred Economy と呼んでおり、これは縮小社会の理念と相通ずるところが多い。本稿は、彼の以下の二つの主書の内容(の一部)を簡単に紹介する。最初から要約するつもりで読んだのではなく、両書を通読した後で短期間にまとめたものだから、断片的かつ重要な部分が抜けている可能性があることを容赦願いたい。研究会当日で使った資料に若干の修正・追加をした。

① "The Ascent of Humanity" Panentheia Press, 2007 (約 460 ページ)

② "Sacred Economics" Evolver Editions, 2011 (約 560 ページ)

Eisenstein : 1967 年生、哲学と数学を専攻。現在は Goddard College (Vermont) , Faculty of the Health Arts and Sciences となっている。著作権に対する著者の考えにより、両書とも全文無料公開されている。( <http://sacred-economics.com/> / <http://www.ascentofhumanity.com/text.php> )

## 1. 希少性と貨幣の経済

- (1) 現在の経済学の基礎は個人的利益の最大化。私欲は希少性 Scarcity が前提。しかし、物事の希少性は Separation に端を発する観念が反映した幻想に過ぎない。
- (2) 希少物の代表はカネ。全てがカネに従属⇒カネの希少性がすべてを希少化。  
⇒生存への脅迫に強要された生活。奴隷と同じ。
  - ・本来は 1 個 1 個異なる筈の物が、現在はカネと交換する個性のない商品になっている。
- (3) 希少化が経済利益を生む。私有化は希少化。経済成長のためにあらゆる資源(自然資源、知的資源、社会的・文化的資源)が私有化され、希少化され、そしてカネに変えられている。
  - ・経済発展とは希少性の拡大。新たに希少化されカネに変じた共有財産の増加。これは富の増加ではなく、希少性の増加であり、富の減少である。
  - ・発展途上国とは共有物の私有化、希少化が進んでいない国を言うに過ぎない。
  - ・自然は共有物。人間の一部分。自然物の私有化は強奪。人の手足をもぎ取ることに等しい。
  - ・知的所有権も自他の Separation 思想から(個人の独立⇒その生産物は個人のもの)。しかし、知的生産物も共有知識の集積で本来は共有。文学や芸術も受け入れる文化があつてこそ。
  - ・今の子供の遊びはゲームなどすべて金を出して買うもので、昔のように自ら創造したものは少ない。創造力という精神的資源がカネに変えられた。
  - ・何もかもカネに変えることは、人生をカネに変えるのと同じ。
- (4) 時間をカネにすることは奴隷生活の象徴。
  - ・カネ社会の進展と共に時間も希少にされ、不安が増し、人間は忙しくなり、人生は短くなる。
  - ・動物、子供、狩猟採取時代の人間にとって、時間は無限だった。時は金ならず。
- (5) 現在の経済成長の行き詰まりは、カネに変えられるものの減少による。
- (6) 利子が経済成長を要求。利子は諸悪の根源。
  - ・財産の所有自体がカネを集める仕組みが現在の経済。
  - ・経済成長率より利子が高い⇒利子を払える者にカネが集中⇒格差拡大
- (7) 現在の貨幣は大部分が借金として銀行が私的に発行(準備金制度)。借金の総額が常に現存する貨幣より多い。椅子取りゲーム(借金返済のためのカネ争い)で格差拡大。借金返済のためますます多くの貨幣を発行する悪循環。
- (8) カネの経済は自他を分断。金を払えば何の関係も後に残らず、絆も共同体も生まれえない。

- ・カネを欲しが最大理由は安心のため。最後の頼りはカネのみ。しかし、カネをいくら貯めても本当の安心は来ない。
- (9) 希少性は Separation 思想から来る幻想。世界は実際は豊かで、70 億人を養うに十分。
- ・現在は幸福に結び付かない資源の浪費が多過ぎる。戦争、軍需産業、郊外の広すぎる住宅、自動車、長距離郵送された食品、40%も遊休している世界の工業生産力等。
- (10) 現在の貧困は生産力の不足でも善意の不足でもない。必要な人と与える人とを結びつける役目を貨幣がしていないから。
- ・その理由は私欲(greed)ではない。私欲は原因でなく、より深い原因 Separation の観念から来る症状に過ぎない。

## 2. Separation (分離、分断、分割、区別)

- (11) 現代社会の諸問題の根底に Separation の思想があり、現代人の観念に深く浸透し、あらゆる方面に及んでいる。Dualism(二元論)はその一つの形。
- (12) 自他の区別
- ・個人は他人から完全に独立して生きられるという幻想。  
⇒相互関係の遮断、匿名性社会、共同体の破壊、共有から私有へ、分け合いから奪い合いへ。
  - ・個人個人への分断→何でも個人的所有、疎外感から物への逃避→一層の疎外感の悪循環、消費増大、経済成長。
  - ・しかし相互関係とは分断された自己の集合ではない。「私は誰か」は相互関係 Relationship の中で定義できるもの。相互関係の軽視は自分自身の生の軽視。
- (13) 人間と自然の区別、物質と精神の区別
- ・人間は自然から独立した存在であり、人間の外に客観的な物質世界があるという考え。  
⇒人間は自然の主人。自然を自由に利用し、支配することができる。
- (14) 善と悪の区別: 絶えず自分の悪(性悪説)と闘う。人間に害を与える生物を悪と決めて撲滅する。
- ・善とは、人間が自然を理解し、知識を広げ、同時に仕事に励み、怠惰、野蛮性、利己主義などの原罪を克服し、向上せんとすること。結局は自然の支配者になろうとすること。
- (15) 物質と精神の区別: 精神世界と物質世界は互いに独立した別の世界  
⇒精神が物質世界を克服し、支配する。しかし、本来は、物質と精神は切り離せない。
- (16) Separation 思想の始まり: 農業=労働の投入=成果は労働者に帰属 ⇒ 私有物の区別。
- (17) 近代の科学・技術思想(Newton, Descartes)は Separation 思想を更に強化。自然の客観化、対象化。
- ・我思う、故に我あり⇒私は世界から独立した観察者。存在は物質から離れた精神の中。
- (18) Separation とカネの社会が絆を分断。絆(tie)は社会的資源。絆を通じて昔は自給していた料理、子守り、健康管理、介護、娯楽、相談、食糧栽培、裁縫、家の建築などが今は商品化され、絆が断たれた。
- (石田注:「絆(きずな)」は漢語(bàn)では「つまづく」「まとわりつく」など動きの妨害、自由の束縛を意味するが、広辞苑では、同様な「牛や馬をつなぎとめる綱」の他に、「断つにしのびない恩愛」「離れがたい情実」という意味も出ている。よって、最近の日本で「絆」が好ましいものとして肯定的な意味で使われるのも誤りとは言えないので、本書の tie または relationship を時により絆と訳した。英語の tie にも縛るもの、拘束するものという意味がある。)

## 3. Ascent (上昇志向、進歩主義)

- (19) Ascent of Humanity は、現代人の精神に深く刻み込まれている観念。これを二つに分けると:
- ・ Scientific Program: 宇宙を完全に理解しようとする一連の行為。
  - ・ Technological Program: 自然を完全に支配(control)しようとする一連の行為。
- (20) 科学は客観性 objectivity と決定論 determinism の仮定の上に構築されている。すなわち:
- ・ 全ての科学知識は実験的に検証可能な客観的真実。観察者は観察対象から独立。

- ・自然のすべては計測、予測、制御可能。人間はいつかは完全な理解が可能。
  - ・自然現象は初期条件、境界条件、外力によって決定。⇒原因と結果を知れば支配可能。
- (21) これらの Program は、人間を無知や迷信の淵から科学の知的存在へ、自然から独立し、自然を客観的対象とし、自然の力を乗り越えて主人となり、肉体の呪縛から離れた精神的存在の高みへ上昇しようとする。
- ・「神が命ずる」「そうしないと神の罰が下る」による善行は分離思想から出た実利主義。
- (22) これらの Program の基にあるのは、物質と精神、創造者と被創造物、人間と自然、善と悪、自己と他者などの二分法。特に他者の二分が基本的。
- ・この二分法は非対称。肉体より精神、自然より人間、世俗より神聖、他人より自分を重視。
  - ・他人より自分の重視は、すべては闘争というダーウィン主義の原理。
  - ・自然資源の保全という言い方も、人間が自然の支配者という前提がある。
- (23) しかし、決定論も客観性も Separation という観念に基づく仮定⇒科学はイデオロギー。
- (24) 技術進歩は現在には既に行き詰まりになっている。
- ・例：医学や農業が発達したように見えても、平均寿命や農業の反収の伸び率減少。
- (25) 現代人は技術による自然の支配、病気や苦痛の克服が不可能なことは既に理解しているのに、いまだに技術ユートピアが政策や行動の暗黙の前提になっている。
- (26) 利己的を悪とするのは、「自己」の誤解から。自分自身を根底から信頼していないため。
- ・大食、面倒がり、他人の事を考えないのは、真の自己から離れてしまったから(本当に自分の事を考えれば大食はしない。欲張りにもならない)。
  - ・怠惰は今の仕事のカネの奴隷になったものであり、本当に自分のためではないから。

#### 4. Separation は幻想

- (27) Separation 思想は人間の本性ではない。狩猟採取時代は自分も他人も共同体(部族など)も自然も区別がなく、一体だった。それが分け合い社会をなし、共同体 community をなした。
- (28) 自然は人間から完全に独立した客観的存在であるという仮定も、自然現象が決定論に従うという仮定も、現在は物理学的にも成り立たない(量子力学)。
- ・スリットを通る粒子の確率的なふるまいは予測可能でも、粒子 1 個 1 個についてのふるまいは決定論に従わず、完全に予測不可能。粒子のふるまいは観察者と完全な独立ではない。
- (29) 質点力学が還元主義の基礎だとすれば、数学はその基礎が乗る基盤。
- ・数学的表現は「確実性」の表現。しかし数学も必ずしも確実ではない。証明なしの公理から出発していること、すべてを計算に入れることは不可能であることなど。
  - ・ Gödel の不完全性定理<sup>1)</sup>、 Turing の停止性問題<sup>2)</sup>、 Mandelbrot 集合<sup>3)</sup>、 Langton の蟻<sup>4)</sup>など。
    - 1) 無矛盾の公理系では真偽の判定ができない場合がある(第一不完全性定理)。公理系が無矛盾であれば、自身の公理系の無矛盾性を証明できない(第二不完全性定理)。
    - 2) Turing 機械(プログラム)の停止性を判定する Turing 機械(プログラム)は存在しない。
    - 3)  $Z_0=0, Z_{n+1}=Z_n^2+C$  の数列が発散しない  $C$ (複素数)の集合。複素平面上でフラクタル状をなす。
    - 4) 格子状のマス目を 1 マスずつ蟻が動く。黒マスに入ったら右、白マスに入ったら左に方向転換。いずれの場合も入ったマスの色を反転させる。いつか必ず「高速道路」が出来るが、それを予測できない。
 (石田注： Mandelbrot 集合および Langton の蟻の動画が You tube で見られる。)
- (30) 質点力学的な観念から量子力学的観念への切り換えは、人間を考える新しい道を開く。自分が自分と無関係な広大な宇宙の中に孤立した存在と考えると、無力感、疎外感、絶望を感じるが、自分と宇宙の区別がなくなれば、その必要はない。
- (31) 部分と全体は本来区別が明確ではない。
- (32) 生物の個体や一つ一つの細胞も他から完全に独立したものではない。
- ・動物の体内にそれなしでは生きられない種々な細菌がいる。細菌は体の一部と言える。
  - ・他の種と共生している生物もいる。

- ・生物体は外界と常に物質交換をしており、内外の境界はあいまい。
- (33) 非客観、非決定論的な思考法も可能。むしろ、今の科学による世界が崩壊しつつあることから、必要でもある。
- (34) 著者は科学を捨てよと言うのではない。新しい世界でも科学的方法は必要かつ重要だが、科学には限界があることを知るべきだと強調している。

## 5. 目的論的な見方

- (35) 現在の科学では、現象をその原因や理由で説明する。これは自然を部分に分けて見ることで、還元主義 Reductionism、技術主義 Engineering、支配主義 Control である。自然は目的を持たない、単なる物質的対象としてしか見ないから、人間による支配を認めることになる。
- ・自然をバラバラに見ると、中には不要と思われることが出て来る。人間はこれを勝手に処分または撲滅しようとするが、実は有用な働きをしていたことが後で分かる場合もある。
- (36) 全ての生ある物、自然のすべての過程、物質のあらゆる一部はみなそれぞれ同じものが二つとない独自の個体であって、全体の欠かせない一部。
- ・古代の精霊信仰 Animism は“全ての物に神が宿る”のではなく、“全ての物は神聖そのもの。”
  - ・電子や原子などの粒子も、1個1個が全く同じではない独特のもので、その動きは外部的な原因に帰せられるものではない。
  - ・標準的なもの、一般的なものを愛することは抽象的な愛でしかない。愛は個人的、独自のなもので、愛する対象と自分との区別がぼやけてくる。
- (37) Darwinism では、進化は無作為 Random な突然変異と自然淘汰の積み重ねによる。進化には目的も意図もなく、突然変異が継承されるか否かは、自己の利益の最大化に適うか否かによる。
- ・ Darwinism では進化の主体は遺伝子。有機体は遺伝子が生き、再生する道具に過ぎない。
- (38) しかし、遺伝子は細胞の指令本部ではなく、環境の「意図」から隔離されたものでもない。最近の研究は進化の合目的性を示唆する証拠を示している：
- ・ 遺伝子の水平移行(Horizontal Gene Transfer：他の生物から遺伝子を取込む)
  - ・ 生物がストレスの下に置かれると遺伝子の突然変異が増える。
  - ・ 細胞、有機体、或いは他の生命を含む環境が DNA に変化を与える(Darwin 自身も環境が遺伝に影響することを認めている)。この変化は生殖細胞に影響し、遺伝可能。完全に否定されていた獲得形質の遺伝(ラマルク説)が復活しつつある。
- キリンの首がなぜ長いかは無作為な突然変異と自然淘汰の累積では説明し難い。より高所のおいしい葉を求めて首が長くなることを願いつづけたことが遺伝子を変化させた。
- ・ 環境の遺伝子への影響を示す直接の証拠は未だ不明だが、それに相応する、従来の進化論とは違った新しい見方をすることが必要。
- (39) 部分から全体を見るのとは逆に全体の目的から部分を見る teleology(目的論)的な見方も必要。全体は部分の単なる集合ではなく、有機体として何らかの目的を持って生きている。
- ・ 進化は超自然の神の設計によるものではなく、自然自身の内部からの目的を持って進化する。
  - ・ 環境が遺伝に影響⇒世界(環境)がその目的のために個々の生物を変化させる。
  - ・ 宗教的な目的論では、超自然的な神による ID(Intelligent Design)と考えるが、これは自然を超越した、自然と分離した神の存在を信じるもので、Separation、Dualism である。
- (40) 物事を区分し、生物や人間の本性を闘争としか見て来なかったことは、自然がそうではない事を見逃してきた。
- ・ 自然に目的があるのなら、科学も自然支配のための科学ではなく、自然の目的に合った科学でなければならない。
  - ・ 人間は現実に抵抗して支配するのではなく、自分自身を全体の目的に合わせるべきである。
  - ・ 全体の目的が何かは、相互の関係 relationship を通じてしかわからない。人は他人を利用するのではなく、理解する必要がある。これは自分は何か、なぜ存在するかを問うこと。
  - ・ これを問えば、標準化され、抑圧された、機械が与える今の生活に我慢できなくなる。
  - ・ 人間や自分の存在目的を問えば、世界観が変わる。人間は人材でも財産でもない。

## 6. Age of Reunion (再結合の時代)

- (41) 数千年の間続いた Separation の時代は終焉し、これからは再結合の時代に入る。
- (42) 現在は政治、金融、エネルギー、教育、医療保健、環境その他種々な問題が悪化して危機的状況が頂点に達している。
- ・ 技術社会の慣性はタイタニック号の如くで、氷山に衝突する航路を突き進んでいる。(アメリカの)民主党は航路を僅かしか変えられず、共和党は氷山に気付いていない。
- (43) しかし、これらの危機が全く新しい方向への転換を必然にする。
- ・ 今日の危機は、Separation の始まる数千年前以来、将来の運命として予定に書きこまれたもの。
  - ・ しかし狩猟採取社会⇒農業社会⇒近代技術社会⇒危機と人類が辿った道は、誤りではない。胎児から成人に至るまでの人間の変化と同様、社会成長の必然の過程。過去の否定ではなく、これを乗り越えることが我々の目的。
  - ・ 人間の出産の苦しみと同様、現在の危機を乗り越えた新しい時代の誕生は苦しみを伴う。
- (44) 現在の世界危機の源は克服すべき利己主義でも貪欲でもない。利己主義も貪欲も Separation、およびそれが生み出す希少性の観念から発した症状に過ぎない。
- (45) 崩壊しつつある現代社会の方向を逆転させるには、ますますよく働き、自分を抑えようと努力するだけではダメ。宗教はこれを何千年もやってきたが失敗している。重要なことは意識の転換。問題は利己主義にあるのではなく、利己主義の誤解による。
- ・ そうすれば所有、蓄積、奪い合いは起らず、分け合いが自然に生ずる。
- (46) 自他の区別、自分と社会の(厳格な)区別を取り除くことは自己の拡大であり、無限化である。
- (47) 再結合の時代は、遊びの時代でもある。義務で仕事をするのではなく、本当に自分のしたい事を、自分のためにする。「こうすべき(Should)」ではなく「楽しむ(play)」世界。これは、何千年も我々を縛り付けてきた時間の観念からの解放でもある。

## 7. Gift Economy (贈与経済、分け合い経済)

\* 贈るためにわざわざ作るのではなく、余ったものを贈るという意味が強い。よって、な日本語としては「分け合い経済」と訳した方がより適しており、なじみやすい感じがする。

- (48) Sacred Economy の基礎は分け合い経済である。原始社会は分け合い社会だった。
- ・ 狩猟採取時代は、今日のように狭い範囲に限定された自己の概念がない。⇒他人と自分の区別がないから、与えることと貰うことも同じ。
  - ・ 現在の経済学者が、狩猟採取時代の分け合いも競争の手段と見ているのは、その面も多少はあったにせよ、現代社会の投影で物を見ているに過ぎない。
- (49) 生きることは与えること。人間は生まれた時はすべてを与えられ、保護されるのみ。与えてくれた大きな存在(親、自然、社会)に対する感謝が発発。
- (50) 分け合い経済では、余った物は、他の人に無償で分け与える。交換のためではない。相手は最もそれを必要としている人。
- (51) 分け合いは純粋な無私ではない。従って、すべての関係を完全に断ち切る匿名慈善事業とは違う。匿名的な慈善は、その後の社会的関係を完全に遮断し、貨幣による交換と類似。
- ・ 受取人にお返し義務はないが、感謝の気持ちを持つのが自然。その自然の感謝の気持ちによって、次に自分が誰かに与える。感謝の気持ちが社会を循環し、共同体が生まれる。
  - ・ 他人の寛容(与える気持ち)を見て、自分にも寛容の気持ちが生まれ、誰かに与えたいくなる。
  - ・ 分け合い社会では受取ることも必要。受取ることは、与える人に対する分け合いでもある。現代人は、貰うことを好まないが、謙遜も遠慮も、結局は絆を拒否すること。
  - ・ 貰うこと=与えること。貰うことによって与える善意が生まれる。貰うより多く与えることが徳というわけではない。
- (52) 感謝もお返しも強要されず、義務でもないことと、感謝によって生ずる絆を期待することは

矛盾するように見えるが、そうではない。期待するのは自然に生ずる感謝の気持ち。

(石田注：ちょうど親子や家族の関係と同じ。したがって、狩猟採取時代は、社会の全員が一つの家族という意識であったと思われる。)

・受取人が全く感謝の気持ちを持たない場合は、与える相手の選択の誤まり。

(53) 豊かな人とは、多くを貯えている人ではなく、多くを分け与えた人。

- ・多くを分け与えた人ほど、多くの人から感謝され、自分が必要な時には分け与えて貰える。
- ・分け合い社会では蓄積は不要。富は蓄積されたものではなく、流れているもの。

(54) 分け合い社会であって初めて本当の共同体 **community** になる。

- ・共同体は自己と同じ。共同体をつくることは自己の拡大。

(55) 分け合い経済は匿名性ではない。誰が何を与えたかは皆にわかる。

(56) 希少性は奪い合いから生ずる。分け合えば物は豊富(必要を満たすに十分)

- ・分け合いで結ばれた共同体では、もはや「あなたに多い事は私に少ない事」ではない。
- ・分け合い経済では本当の必要以上には造らない。資源の収奪が少ないから豊富。

(57) 分け合い経済に戻ることは狩猟採取時代に戻ることはない。蓄積された知識、知恵を活用して新しい分け合い社会を造る事がこれからの仕事。

(58) 財産の私有を認めないのではない。必要とするのは財を所有するだけでカネが集まることのない制度。財産の最良の使い方をする(個人的利益のためでなく)のが企業者。

(59) 世界中の **separation** が一気になくなるのではない。まずは多次元の、種々な自己に時代になる。しかしそれぞれの存在が人間性、それぞれの文化、生物圏、共同体、家族および利己性を持つ。匿名的な、後が残らない分け合いもあるだろうが、役割は限られる。

(60) 「もっと少なく」という環境論者には同意しない。実際は、もっと多くなれる：美しさ、共同体的、満足、美術、音楽、そして数は少なくとも効用も美的にも優れた物。

(石田注：本書全体の文脈から、物質の絶対量が無限に存在することを意味するのではない。)

## 8. 分け合い経済の貨幣

(61) 貨幣は自己利益の最大化を目指した物々交換の効率化に起源を發したという経済学教科書の説明は誤りで、人類学者によれば古代は物々交換(貨幣を用いないだけで本質的には貨幣取引と同じ)はあまり行われておらず、重要性もなかった。

(石田注：人類学者 Graeber の近著も、歴史的には物々交換→貨幣への変化ではなく、物々交換は貨幣が十分に使えない時の臨時的な手段だと述べている。David Graeber, "Debt: The First 5000 Years" Melville House Publishing, 2011)

(62) 社会の規模が部族など数 100 人以下なら、すべて顔見知りだから貨幣は不要だが、共同体の規模が大きくなれば、貨幣も利用。ただし価格を決めるのは与え側でなく受取り側。

(63) 分け合い経済の貨幣は現在の貨幣とは役割が違う。初期の貨幣もそうだった。素朴な例：

- ・あなたに必要な物を私が持っており、私はそれをあなたに上げたいと思い、上げる；
- ・あなたは感謝して私に何か差し出したいと思ったが、私が今特に必要なものはない；
- ・そこであなたは何か印になるもの(例えば貝殻の首飾)をくれる。それは、誰かの私に対する感謝の印で、いつか誰かが私の必要を満たしてくれた時に、感謝の印として差し出す。

(64) 貨幣が現在の貨幣でなく贈り物の性格を持つためには：

- ・与え側と受取り側のバランス(現在はカネはより多く持っている方に流れる)。環境コストの内部化は、地球から与える以上にとらないための方策の一。
- ・贈り物がどこから来たかの認識が必要(匿名的でない)。自然からの贈り物(皆の共有物)を利用する利益は皆に還元する。
- ・贈り物は貯えられず循環する。減価貨幣は、贈り物が所有より流動することを確実にする。
- ・贈り物はそれを最も必要としている人に向かって流れる。

(65) 投資は初期経費の回収と労働以上の利益が目的であってはならない(利子を返すための利益

でも)。そのような利益のための投資である限り、世界をカネ化することに変わりはない。

## 9. 分け合い経済への方策、実施例など

### (66) 減価貨幣、負の利子。

- Silvio Gesell の Free Money(減価貨幣) はケインズも賞賛。1930年代、オーストリアの Worgl で実施(スタンプ方式 1%/月)し、うまくいっていたが、中央からの圧力でつぶされた。

### (67) 地域通貨または補完通貨。現在の先進国は地域の生産物が非常に少ないので、地域通貨も困難になっているが、神聖な経済では一定の役割をする。

- Proxy currency (代用通貨 例: Berkshire, Massachusetts, 2006-): 銀行で 100 Berkshire を \$95 で購入。Bk を使う時は \$ と同じ額面。100 Bk 受取った店は銀行で \$95 と交換可。使った人は 5% の割引、店は顧客増加。地域産品の購入にはならないが、補助通貨導入の意識向上になる。
- Complementary fiat currency (補完不換通貨 例: Ithaca Hour, New York)
- Time Banking: サービスの労務時間として時間銀行に登録。登録した時間だけサービスを受けられる。(石田注: 現在 26 か国、英に 250、米に 53 あるという)。
- 日本のふれあい切符
- Local Exchange Trading System (LEDS): 貨幣は銀行でなく取引ごとに発行。取引があると両者の口座の貸方、借方に取引額を登録。
- Mutual credit system(相互信用制): 業者の信用組合内で取引額を登録。銀行を介さない。

### (68) Economic Rent の廃止(Rent とは、土地、鉱物資源、著作権、電磁波帯など、所有することだけで受ける利益を指す。これらはもともと公共なもので、個人が所有すべきものではない)。

- 鉱物資源の国有化、地税、知的所有権の期間短縮など
- ゲノム、電磁波など新しい富の源は好況の用途にしか使わせない。
- Rent の廃止は豊かな国と貧しい国の賃金の差を縮める

### (69) 環境コストの内部化: 排出権取引制度など。環境コストの内部化は「規模による経済」の幻想を取り除き、長距離物流を削減する。

### (70) 贈与の考えを入れた事業の例:

- Karma Clinic (カ州): 東洋医学的な治療。伝票には「治療は以前に来た人の贈与です。よろしければ、これから来る人のためにお好きなだけ贈与 box に入れるか郵送を」とある。
- Panera Bread (restaurant chain) の "pay-what-you-want store" (Missouri): 試験中。価格は参考。客が自分の評価で支払う。
- Valorem の法律グループ (シカゴ): 明細書には普通の項目の他に調整欄があり、支払者が自由に記入する。+でも-でも良い。一般的には、明細書は経費(実費)のみで、労賃、労働時間、技能は贈与であると明記し、空白の Gift 欄には支払者が自由に書き込み、それらの合計を支払う方法が考えられる。これらは、支払額は感謝の意を表す自由な額で、明細は単なる情報となる。
- インターネットのフリーソフト、無料公開の情報

### (71) Social Dividend (または Social Wage): 経済生産の源である物質的、知識的、文化的、社会的資源は本来共有であることから、人々に貨幣を支給する。

- 余った時間を経済生産のためではないが重要な仕事に使う人が増える。
- Social Dividend に類似する例:
  - アラスカ州は州の油田の利益を州民に分配。(1人1年数千ドル)
  - アメリカが 2008 年に納税者全家庭に支給した手当(stimulus check)
  - ドイツの時短(Kurzarbeit): 企業が労働時間を 20%減。政府の補助で賃金減を 4-8%に抑える。

## 10. 具体的提案について

### (72) 社会崩壊の寸前にある現在の種々な危機(政治、金融、エネルギー、環境、健康その他)を前にして、著者はこれを楽観的に見ている。現状を軽視した楽観でも、技術の可能性への楽観でもなく、危機的状況が進めば進むほど意識の大転換が必ず起るから。

- ・危機的状況が頂点に達すれば、それまで不可能と言われていた大胆な解決法が可能で現実的なものになる。アル中患者に断酒を勧めてもだめだが、行くところまで行けば必ずやめられるのと同じ。
- ・時は既に遅しではあるが、問題はその時がどれだけ早く来るか、危機の底打ちがどの程度で収まるかということ。

(73) 方法は既に存在している。必要なことは意識の変換のみ。

- ・技術もまた既にいろいろある。風力発電、分解が容易で再利用可能な BMW の自動車や松下の洗濯機、有機農業などなど。ただし、文化的、経済的な文脈が欠けている。持続可能な技術を促す社会構造がないこと、自然と人間の分離の意識から脱する精神的な革命がないこと。
- ・従来のような技術の魔法や奇跡は今後も期待できるが、動機が変れば、技術の方向も応用も変る。

## 追記 (石田感想)

具体的な方策について著者は上のように書き、或いは実例を上げてもいるが、なおかつ、本書を具体的な提案が乏しい、絵に描いた餅に過ぎない、机上の理想論で現実離れしている、などと評する人がいるかも知れない。原発の即時廃止、縮小社会、あるいは将来の社会を論じた書物などにも同様な批評は多い。しかし、実際は著者の言うように、具体的方法は既に数多く存在し、本書にも地域貨幣、減価貨幣や負の利子などいくつか紹介されている。これ以外にも預金準備率の100%化、省エネ運動、化石燃料消費の上限設定、累進的なエネルギー税、地産地消の推進、関税などによる貿易制限や地域産業保護、超小型低速自動車の推進や公共交通機関の充実、企業の公有化、企業化の制限、ベーシックインカムなど、その他種々な方策があり、物理的・技術的に不可能な点は何もないから、「その気」にさえなれば、たとえ一度には無理でも、少しずつなら実現可能なことばかりである。目的さえ定まれば、その他の具体策や解説書はそれぞれの分野を得意とする人達からいくらでも出て来るに違いない。これらの方策は互いに関連しており、いずれも単独で目的を達成するものではないが、全体の目的に関する意識が確かであれば、最も有効な組み合わせが自然に取られるだろう。アイゼンスタインは、具体策はそれぞれの地域や文化や条件に応じて考えればよいことだと言っているのではないだろうか。

上記のように、実現可能な具体策が多数提案されているにもかかわらず、なかなか実現できないのは、現在の便利な生活、経済成長路線、現在の社会構造という基本的な枠組みを変えたくないという意識、アイゼンスタインによればその根本原因である **Separation** の観念が妨害しているからである。例えば、大量生産・大量消費の経済に影響を与えて環境型の社会近づける目的のエネルギー税が、経済に影響するという理由で反対されたり、脱原発が電力不足で経済が崩壊すると反対されるのも、まさに意識だけの問題である。理想論、机上の空論という批判は、往々にして、意識を変えたくない人が提案に反対する話法として使われる。

既にある種々な方策を本当に実施する上では細かな課題があるとしても、それは大した問題ではなく、意識さえ変れば、実現に向かって大きく前進するだろう。本書の役目は具体的な方策の各論ではなく、現代人の心深くに根付いている意識を変えさせることに重きを置いており、その役割を十分は果たしていると思われる。